

豊橋ライターズとは

豊橋というまちについて関心を寄せる市民が、それぞれの気づきを表現したり、表現の技術を学びあったりする大人の部活動として、2018年から活動をスタート。全員に共通しているのは「豊橋が気になっちゃう」という郷土愛と好奇心。定期的な勉強会を開いたり、取材活動、まちに関する情報発信を行ったりしています！随時、部員も募集中です！勉強会などの様子は毎月レポート形式にて豊橋市ホームページで公開中！



豊橋ライターズの日常

基本的には、毎月第2土曜日に中央図書館の会議室に集まり勉強会を行っています。まずは、部員同士の情報交



換からスタート。それぞれの部員たちが気になる豊橋のモノ・コトなどを情報共有してお互いの知識を深めます。勉強会のメインは、取材活動についての話し合い。みんなで行ききたい取材先テーマなどをゆるく楽しく話し合います。

開館前から「大人の部活動」はじまっちゃうってすすす



市民のサードプレイス 大人の部活動

TOYOHASHI ライターズ

まちなか図書館(仮称)は、家庭でも職場でもない、親しみやすく居心地のよい第3の場所
「市民のサードプレイス」として、人と人とのコミュニケーションを図り、まちづくりなど市民主体の活動に繋がる環境やサービスを創出することで、共通の趣味を共有したい人や仲間を探している人などが集まり活動する
「大人の部活動」の場としての活用も想定しています。
そんな中、開館を待ちきれず、まちなか図書館開館準備室のサポートのもと、絶賛活動中の「大人の部活動」があります。その名は「豊橋ライターズ」。
今号ではそんな彼ら、彼女らの活動内容を中心にお伝えします。

どよはしのシチズンシップ

部員たちの取材内容を集めた冊子「どよはしのシチズンシップ」。文字のフォント・文字の大きさをレイアウトまで、すべて部員同士で話し合ってお互いに考え、決定していきます。すべて、手作りです。

製本も自分たちで行います

作品の製本・納品もメンバー



合言葉は「ゆるく楽しく」

2019年は月に一度のペースで定例会を行い、春に計画したとおり、ええじゃないかの取材も、石巻山登山も達成でき、充実の活動内容となりました。お仕事の都合や家庭の事情など、さまざまな理由により毎回参加が出来ないメンバーもいますが、そこが重要ではありません。そもそも「ゆるい」が持ち味の豊橋ライターズ。それぞれが自分のペースで楽しめる場であり続けてほしい。無理をせず、細く長く継続することが目標。メンバーが息切れしないための合言葉は「ゆるく楽しく」。これこそまさに豊橋ライターズ版のSDGs「持続可能な、愉快で楽しい！活動目標 (Sustainable "delightful" Goals) 」。



まちに飛び出すライターズ

平成最後の春、いよいよライターズがまちに飛び出しました！豊橋が発祥といわれる「ええじゃないか」の謎に迫るため、豊橋ライターズが向かったのは二川宿本陣資料館。誰が最初に牟呂村でお札を降らせたのか……実は、お祭りでもドンチャン騒ぎしたい若者だった？ そんな知れば知るほど誰かに話したくなる歴史の裏側を「ええじゃないか」を愛してやまない、二川宿本陣資料館学芸員和田さんに伺いました。



二川宿本陣資料館学芸員 和田 健二さん



◆ええじゃないかとは慶応3年(1867年)、三河国渚郡牟呂村(現豊橋市)で瑞を降した「ええじゃないか」は、伊勢神宮などのお札の降下を契機に村中が臨時の祭礼を行い、民衆が「ええじゃないか、ええじゃないか」と囃し立てながら乱舞した社会現象でした。

ときには大人の遠足でクライマーズに

集合時間と集合場所だけ決めたら、あとは題材も、取材先への移動手段も、持っていくお菓子の上限金額もすべて自由。部員各々が好きな方法で石巻山に集まり、自然史博物館学芸員長谷川さんのガイドのもと、普段は身近すぎ意識していない場所を山頂目指しながら深掘り。この取材でそれぞれが思ったことを書いたり、書かなかつたり。徹底的にゆるい活動なのです。



石巻山



自然史博物館学芸員 長谷川 道明さん

どよはしのシチズンシップ

平成最後の四月、ええじゃないかの謎に迫る！編「ええじゃないか現象と」田中洋斗
みなさん知っていましたか？幕末に「か所」で始まったええじゃないか現象が東は江戸、西は広島まで伝わっていました。その始まりこそが、ここ豊橋だったのです！今から30年前に発見された資料によると、ええじゃないか発祥の地は豊橋ということになります。明治元年(1868)の年である慶応3年7月14日(旧暦)、当時の牟呂村にて神社のお札が降ったのが始まりでした。「ええじゃないか」は後の学者が全国的に起きた一連の騒動に対してつけた名前です。まずお札が降って、それを祀り、祝宴し、男装や女装が行われ、ええじゃないか等の囃子詞を言いがら踊り歩くというものです。お札が降ってどうしよう……と疑問に思いますよね。実際には竹垣に挟まっていたお札を見て降ったと言っていたそうです。エスカレートして金貨やら仏像やら様々なものが降ったか。慶応2年には大凶作があったり、社会不安が大きかったこの時期、世直しを期待する多くの人々が非日常的な行動を起こしたのです。突如として始まったと思われるこの騒動は、おそろいの法被を着ていたという事実があり、しっかりと準備をしていた計画的なものであったようです。ところで、「ええじゃないか」は囃子詞なんです。実は豊橋では「ええじゃないか」とは言っていません。「ええじゃないか」の「ええ」は関西弁なので当然といえば当然です。豊橋では「おかげ」と言っていたそうです。このため、ええじゃないかと豊橋の結びつきに何となく違和感を持つ人もいるかもしれません。ええじゃないか現象の発祥は現在の豊橋市けれど、この辺では囃子詞が「ええじゃないか」ではなかったということです。いずれにせよ、民衆の能動的な行動には、何か奮い立たせるものを感じます。自分たちの意思で、この世の中をより良いほうに変えていこうという気持ちと行動が、現代においても必要とされているのではないのでしょうか。

大人の遠足でクライマーズになる！編

アタリマエはアリガタイ 松野公秀
スペインのある哲学者の言葉に、「私は、私と私の環境である」というものがある。自分自身を形づくるのは自己だけでなく、他者との関わりや周囲の環境との相互作用。という意味らしい。今回の取材は、この山に登るのが小・中学生以来である私に、まさにそれを実感させてくれるものであった。まず、自然史博物館の学芸員である長谷川氏の解説を受けるなかで、オモイガケナマイマイ等、石巻山特有の石灰岩でできた環境にしか生息していないものがあるのは、衝撃を受けた。この陸生巻貝の名称の由来は、まさに名前通り思いがけない所から発見されたからというのだから面白い。何か子供のアニメのキャラクターとして登場しそうなユニークな名前だ。地元でこのような面白い生物がいた事を今まで知らなかった。さて、石巻山と言えど何と云っても山頂や駐車場から見下ろす雄大な景色である。よく海外の旅行者が日本の景色を見てアメイジングと言うが、この景色はまさにそれである。海外の人にとっては、私達がかの国々の歴史建造物を見て感動するくらいのアメイジングさが石巻山にはあると思う。特にここから見る夜景は、天下一品であろう。しかし、残念な事に私を含めた多くの豊橋人が、地元の良さに気づいていないと思う。これは、果敢にある首都の名を冠した某有名テーマパークも、その近郊に住む人が意外と行かないのと同じか似ている。これは、「アタリマエ」だからだろう。人は、当然な事にはやがて有り難みを感じなくなる。なぜなら「アタリマエ」だから。人は、「あれがあれば」「こんなはずでは」と焦り、思い悩む時がある。しかし、時には立ち止まって自分の身の回りの環境に感謝してみる。そんな時間も必要なのかもしれない。最後に一言。石巻山特有の環境でしか生きられないオモイガケナマイマイ達は「ここが、私と私の環境である」

※とよはしのシチズンシップより作品の一部を掲載